

平成21年 5月29日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008年度

課題番号：20560585

研究課題名（和文） まちづくりと連動する地域貢献学習システムの開発

研究課題名（英文） Development of the system of service-learning
linking community design

研究代表者

志村 秀明（SHIMURA HIDEAKI）

芝浦工業大学・工学部・准教授

研究者番号：10333139

研究成果の概要：米国等の海外で実施されている地域貢献学習（サービス・ラーニング）の先進的な事例の調査を行った。その結果、地域貢献学習を実施する上での大学の体制、教員や学生の活動の傾向等を明らかにした。一方で日本国内においても、先進的な事例について調査を行い、我が国における地域貢献学習の現状を把握した。これら二つの調査を統合し、我が国で地域貢献学習を普及するための方法について考察した。

注釈）本研究は、3年度にわたる研究を予定していたが、研究代表者の海外留学のために2008年度の1年間で研究を終了した。ここに研究成果をまとめているが、2010年度から研究を再開したいと考えている。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
年度			
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築学・都市計画・建築計画

キーワード：都市計画、人間生活環境、教育学、まちづくり、地域貢献

1. 研究開始当初の背景

我が国における市民参加のまちづくりは益々活発になっている。NPO法人の数は3万を越え、まちづくりに係わるNPOの数も順調に増加している。それに合わせてまちづくりを支援する方法の開発も多く行われている。本研究代表者らも、ワークショップの手法を用いた「まちづくりデザインゲーム」という手法を開発してきたように、大学研究者や学生、専門家がまちづくり活動を支援する方法論や手法は確立されつつあると言え

よう。

一方で将来の我が国の社会とまちづくりを担う学生への教育方法や市民への教育の緊急性が増している。20世紀後半のアメリカ合衆国（以下：米国）では、学生が実利を優先してお金を稼ぐことしか関心を示さないミーイズムと呼ばれる自己中心的な考え方をする傾向が広まった。それと同じような状況が我が国の若者にも起こっている。市民の義務と責任、社会的マナー、倫理観を教育に取り入れる必要性は論を待たない。米国で

は知識偏重の教育の反省から、地域体験型の教育・学習方法である「サービス・ラーニング（地域貢献学習）」が広まっている。これは、学生が大学での学習や研究で身につけた知識や開発した技術を用いてボランティア活動を行うもので、地域体験型のプログラムのため、都市計画・デザインに係わる教員が関与していることが多い。このような取り組みの実態調査を行い、概念と手法を我が国に導入することの意義は大きい。しかしながら、元々ボランティア活動が盛んな米国と我が国の市民性は大きく異なり、単純な導入はできない。我が国の学生、地域社会の実状に即した導入が求められる。

本研究は以上のような背景から、まちづくり支援に関する研究開発とサービス・ラーニングという教育プログラムを関連づけようとする学際的研究である。

2. 研究の目的

本研究では、まちづくり支援に関する研究実績とまちづくりの実践活動を基盤として、米国等で行われている地域貢献学習（サービス・ラーニング）を我が国に導入・普及する方法について考察する。具体的には、以下の3つを目的とする。

(1) 米国、カナダ、オーストラリアにおけるサービス・ラーニングに関する実態解明

(2) 我が国におけるまちづくり支援の実践状況とその教育効果の解明

(3) 我が国における、まちづくりと連動する地域貢献学習を普及するための方法についての考察

3. 研究の方法

本研究は、第1に米国等の海外でのサービス・ラーニングの実態の解明、第2に我が国におけるまちづくり支援の実践状況とその効果について明らかにする。以上の2つを比較・分析することによって、まちづくりと連動する地域貢献学習システムについて考察する。

(1) 米国等で実践されているサービス・ラーニングは、我が国にとっては新しい教育方法の概念である。そこでこれについて先行して調査し、支援制度や具体的な実践プログラムや仕組み、運営等について明らかにする。我が国の実状に即した地域貢献学習システムを構築する上での参考とするためである。具体的には、①米国におけるサービス・ラーニングの背景、支援制度について、キャンパス・コンパクト（Campus Compact）、Association of American Colleges and Universities の支援活動、National Service-Learning Clearinghouse の支援活動、の3つについて調査することで明らかにする。②米国、カナダ、オーストラリアにお

ける実態について、カリフォルニア州立大学バークレー校（以下：UCバークレー）、ポートランド州立大学、ワシントン州立大学、ブリティッシュ・コロンビア大学（以下：UBC）、南オーストラリア大学を事例として明らかにする。

(2) 我が国におけるまちづくり支援の実践状況とその効果については、研究代表者の大学が支援活動をしている複数の地区を対象にして調査すると共に、先進的な取り組みについても調査する。具体的には、研究代表者の支援活動地区から、東京都江東区、中央区、福島県南会津町を事例とし、また先進的な取り組みとして、東京芸術大学が支援活動を行っている茨城県取手市を事例とする。

(3) 以上の調査、分析から、我が国における、まちづくりと連動する地域貢献学習を普及するための方法について考察する。

4. 研究成果

本研究は、「米国、カナダ、オーストラリアにおけるサービス・ラーニングに関する実態解明」及び「我が国におけるまちづくり支援の実践状況とその効果の解明」の2つについて、以下のように調査・分析を進めた。またそれら2つの分析をもとにして、「我が国における、まちづくりと連動する地域貢献学習を普及するための方法についての考察」を行った。

(1) 米国、カナダ、オーストラリアにおけるサービス・ラーニングに関する実態解明

ここでは、①米国におけるサービス・ラーニングの背景、支援制度、②米国、カナダ、オーストラリアにおける複数の大学の事例、の2点から調査・分析を行った。

①米国におけるサービス・ラーニングの背景、支援制度

キャンパス・コンパクト（Campus Compact）、Association of American Colleges and Universities、National Service-Learning Clearinghouse について、インターネット等で公開されている情報から調査を行った。その結果、以下のことを明らかにした。

まず背景として、1980年代から、大学でエリートを目指して勉強している学生には、実利を優先しお金を稼ぐことだけに興味を示す傾向や、ミーイズムと呼ばれる自己中心的な考え方をする傾向が広がり、社会問題化していった。それが1985年のキャンパスコンパクト（地域貢献学習を推進する大学連盟）の設立につながった。ここには現在、ほぼ全米の大学が加盟している。更に、Association of American Colleges and Universities (AAC&U)、National Service-Learning Clearinghouse が、シビック・エンゲージメント（Civic Engagement）

という概念を提示し、推進している。これはサービス・ラーニングに加えて、コミュニティ教育、コミュニティに基づく調査、連携プロジェクト、インターンシップ、経験学習、海外学習等を包括的に指し示した言葉であり、現在多くの大学で使用されている。制度としては、全米を通じたものは無いが、様々な助成金制度が公的機関、大学、NPO単位で準備されている。

②米国、カナダ、オーストラリアにおける大学の取り組み

米国での事例調査としては主に西部の大学、UCバークレー、ポートランド州立大学、ワシントン州立大学の3校について調査を行った。またカナダでは、UBCについて、オーストラリアでは、南オーストラリア大学を事例として調査を行った。その結果、以下のことを明らかにした。

UCバークレーでは、学生、教職員の地域貢献活動を支援するために、Cal Corps Public Service Center と Community Relations の2つを組織している。前者は社会貢献プログラムや、コミュニティのパートナー情報を提供している。後者は、キャンパス周辺のコミュニティとの連絡調整役であり、また学長の地域連携基金の窓口となっている。両者は全く独立している訳ではなく、相互に情報交換を行っている。そして実際の学生や教員の地域貢献活動は、いくつかのセンターが中心となっている。最もまちづくりの分野に近い活動を行っているのが、

Institute of Urban And Regional Development (環境デザイン学部)の中にある Center for Cities & Schools (以下: CCS) と Center for Community Innovation (以下: CCI) である。CCSでは、1999年から Y-PLAN@10! という学生達の地域貢献活動が行われている。これは都市環境やコミュニティに関する活動であるが、参加している学生は経済学や社会学の専攻等様々である。また CCSはサンフランシスコの高校等と連携して、高校生社会事業 (Social Enterprise for Learning) を支援している。一方 CCIは、NPO や公的組織と連携して貧困層に関わる問題や、コミュニティの問題に取り組んでいる。特徴は、両センターとも多数の教職員が関与する組織的活動ではなく、中心となる教員が存在してイニシアティブをとっていることである。また CCSは教員がイニシアティブをとりながらも、30人以上の学生が自主的に歴史的建築物の保存活動、緑地再生、環境問題等に取り組んでいる。他にも地域貢献活動を行っているセンターは20以上存在する。以上のように UCバークレーでは、大学に社会貢献担当機関を設置し、具体的な取り組みは各センターや教員・学生に委ねている。

ポートランド州立大学では、82.7%がオレ

ゴン州出身の学生ということもあり、地域との関係に重点をおいたサービス・ラーニングを行っている。大学のパンフレットにも、Engaged Learning (社会的学習) としてサービス・ラーニングを位置づけているように、この取り組みを非常に重視していると言える。Capstone という卒業前の総仕上げ的な科目として、サービス・ラーニングをほぼ必修化している。また取り組みは地域密着型であり、Community-based Learning (コミュニティに基づく学習) という言葉を多用している。大学としては、Center for Academic Excellence の中に Community-University Partnerships という機関を設置している。以上のようにポートランド州立大学は、地域貢献学習に対して大学全体として重要視して取り組んでおり、地域密着型という特徴がある。

ワシントン州立大学では、大学の担当機関として Carlson Center (Carlson Leadership & Public Service Center) を設置している。ここがサービス・ラーニング等の学生の地域貢献活動を一括して管理している。サービス・ラーニングの授業も多く、まちづくり系のもので Introduction to Community, Environment, and Planning があり、これは今回調査を行った範囲では、最もまちづくりに関係するサービス・ラーニングとして明確に位置づけられているものであった。2008年度春のコースでは、25名ほどの学生が履修し、これは学部1年生の学生がほとんどで、また経済や法律等様々な分野の学生が履修していた。学生の成績評価は、学生が演習に参加した外部組織が行い、その評価方法も確立されていた。着実に、サービス・ラーニングの成果を積み上げていると言える。

UBCでは、Learning Exchange がサービス・ラーニングを含めた学生の実習プログラムをコーディネートしている。Learning Exchange は、最初の UBC 行程表

(Trek2000) にもとづくコミュニティとの結束活動の成果として創始された。1999年の夏に Margo Fryer と Brian Lee の2人の UBC の学生が中心市街地東地区のコミュニティ再建のコンサルタントとして雇われた。学生達は住民と話し合い、健康、社会サービスの専門家と話し合った。これが UBC の Learning Exchange の始まりである。1999年には、中心市街地東地区の NPO と小学校に30人のボランティアの学生が入った。2000年の秋にメインストリート121にラーニングエクステンジの出張拠点

(Storefront) が開設された。それからラーニングエクステンジのプログラムは急速に拡大していった。このプログラムの最初の5年間に二桁の学生達が毎年参加し、その学生達の熱意はコミュニティを変えていった。

2005年までのこのプログラムは800人の学生に達した。現在、具体的なプログラムはStorefront Programs（拠点プログラム）とTrek Program（出張プログラム）とSchool Programs（学校プログラム）の3つがある。このように、UBCでは、数人の教員が中心となって、地域貢献学習を広げていった。また他にもUBCでは、Campus & Community Planningという機関が、教員や学生、スタッフの住宅供給を積極的に行っている。大学町の建設に大学が深く関わっているという特徴がある。

南オーストラリア大学では、サービス・ラーニングと呼べるような授業は特に行われていない。学生のPublic Serviceに関する支援は、米国やカナダに比べて少ないと言える。しかし地域支援の研究については、Centre for Work + LifeやUrban and Regional Planningが実施している。これらの研究機関は、特にコミュニティ形成に力を注いでおり、地域に密着した研究を行っている。

以上のように、各国、大学によって取り組み方に違いはあるが、地域貢献に取り組んでいること、コミュニティ改善に参画していることは共通している。そして、それぞれの特性を踏まえて、具体的な活動と体制づくりをしている。特に米国の大学の地域貢献学習の取り組みは進んでおり、参考にできる点が多いと言える。

(2) 我が国におけるまちづくり支援の実践状況とその効果の解明

ここでは、研究代表者が支援活動を行っている東京都江東区、中央区、福島県南会津町を事例として、また東京芸術大学が支援活動を行っている茨城県取手市を事例として、実践活動を通じての調査・分析を行った。

①東京都江東区

亀戸地区と豊洲地区において、地域支援活動を行いながら調査を実施した。まず亀戸地区では、亀戸文化センターとまちづくりの連携講座を実施し、その経過等について分析した。その結果、連携講座によって地域に関する情報が着実に収集できること、市民は地域情報の収集や整理を主に務め、大学は地域情報の最終成果物作成を主に務め、また文化センターは情報発信等を主に務めていたことを明らかにした。

一方豊洲地区では、運河ルネッサンス協議会設立の活動を通じて、大学と行政・地域住民組織との連携には、大学への信頼感が大きな要因となっていたことを明らかにした。

②東京都月島

「月島路地ビール」の企画・販売による基金の制度を確立した。それによって、商店街組織と大学との連携のモデルを提示した。

③福島県南会津町

芝浦工業大学セミナーハウスがある南会

津町館岩地区は典型的な中山間地域である。その「たのせ集落」と芝浦工業大学との連携によって、地域づくりイベントを実施した。その経過と結果を分析することにより、住民、町、大学の役割分担のあり方、また定期的なイベントとして継続できる可能性があることと、資金面での若干の課題を明らかにした。

④茨城県取手市

東京芸術大学が1992年から支援している「取手アートプロジェクト（以下：TAP）」について、これまでの事業とその成果、また運営体制に着目して分析した。その結果、大学の長期的な支援は意義が大きく、成果として人材育成が挙げられる。課題としては、組織改編の検討が必要であることを明らかにした。

(3) 我が国における、まちづくりと連動する地域貢献学習を普及するための方法

まず「米国、カナダ、オーストラリアにおけるサービス・ラーニングに関する実態解明」から言えることは、地域貢献（Public Service）と言っても、学生・教員から社会に対して一方向に流れる献身的な「奉仕活動」ではなく、自己形成として価値を見いだした学生が活動に参加し、また教員も研究や教育面での価値判断から活動に参画している傾向があった。つまり、文化的な差異からくるボランティア精神は確かに大きな違いだが、自己形成に価値観をもつようになれば、我が国においても地域貢献学習はまだ拡大すると言える。

また大学の各センターは個々の活動の所属機関として機能し、場合によっては民間企業やNPOから供給される活動資金の管理を行っている。更に大学全体として、活動意志をもった学生や教員、センターを支援する仕組みを準備していた。このような連携体制は我が国の大学には見られず、今後改善を進めていく必要がある。

「我が国におけるまちづくり支援の実践状況とその効果の解明」からは、大学への地域の信頼感が土壌となって地域連携が生まれる可能性が大きいこと、また実際の連携事業では、住民、公的機関、大学の役割分担が明確に意識される必要があること等を明らかにした。また人材育成に効果を発揮している反面、資金面で課題があることを明らかにした。

以上のことから、我が国において、まちづくりと連動する地域貢献学習システムを普及させるためには、関係する機関の役割を意識しつつ、米国の例を参考にしつつ連携体制を構築し、人材育成における成果を意識して自発的な活動を尊重して事業を進め、一方で資金面での課題を解決していく必要があると言えよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

- ① 黒沼剛、志村秀明、他 2 名、「中山間地域における集落の実態と展望に関する研究 (1) —福島県南会津町たのせ集落の世帯構成と農業—」日本建築学会大会学術講演梗概集、査読無、F-1 分冊、2009、2p (ページ未定)
- ② 松島裕司、志村秀明、他 2 名、「中山間地域における集落の実態と展望に関する研究 (2) —福島県南会津町たのせ集落における直売所実験と地域交流—」日本建築学会大会学術講演梗概集、査読無、F-1 分冊、2009、2p (ページ未定)
- ③ 岩井百希恵、志村秀明、「アート活動を通じた大学の地域貢献に関する研究 —取手アートプロジェクトを事例として—」日本建築学会大会学術講演梗概集、査読無、F-1 分冊、2009、2p (ページ未定)
- ④ 志村秀明、「大学の社会貢献活動とその仕組み —UC バークレーを事例として—」都市計画 (日本都市計画学会)、査読無、279 号、1p (ページ未定)
- ⑤ 岩田啓吾、志村秀明、他 4 名、「生活景育成ツールとしての「まちなみ川柳」に関する研究 —福島県二本松市竹田根崎地区での取り組みを事例として—」日本建築学会大会学術講演梗概集、査読有、F-1 分冊、2008、p703-706
- ⑥ 浅海宏匡、志村秀明、他 4 名、「都心部における開放型キャンパスの中庭利用の実態に関する研究 —芝浦工業大学豊洲キャンパスを事例として—」日本建築学会大会学術講演梗概集、査読有、F-1 分冊、2008、p225-228

[学会発表] (計 5 件)

- ① 黒沼剛、志村秀明、他 2 名、「中山間地域における集落の実態と展望に関する研究 (1) —福島県南会津町たのせ集落の世帯構成と農業—」日本建築学会大会、2009 年 8 月 27 日 (予定)、東北大学
- ② 松島裕司、志村秀明、他 2 名、「中山間地域における集落の実態と展望に関する研究 (2) —福島県南会津町たのせ集落における直売所実験と地域交流—」日本建築学会大会、2009 年 8 月 27 日 (予定)、東北大学
- ③ 岩井百希恵、志村秀明、「アート活動を通じた大学の地域貢献に関する研究 —取手アートプロジェクトを事例として—」日本建築学会大会、2009 年 8 月 27 日 (予定)、東北大学
- ④ 岩田啓吾、志村秀明、他 4 名、「生活景育

成ツールとしての「まちなみ川柳」に関する研究 —福島県二本松市竹田根崎地区での取り組みを事例として—」日本建築学会大会、2008 年 9 月 18 日、広島大学

- ⑤ 浅海宏匡、志村秀明、他 4 名、「都心部における開放型キャンパスの中庭利用の実態に関する研究 —芝浦工業大学豊洲キャンパスを事例として—」日本建築学会大会、2008 年 9 月 20 日、広島大学

[図書] (計 1 件)

- ① 後藤春彦、小林敬一、志村秀明、他 14 名、日本建築学会編・学芸出版社、「生活景 —身近な景観価値の発見とまちづくり—」総 p286 (執筆 p165-p174 及び p263-p277、及び編集)、2009

[その他] (計 12 件)

- ① 志村秀明、他 5 名、「「ビール」でアピール・まちに乾杯 月島路地ビール」建築雑誌 (日本建築学会)、5 月号・Vol. 124 No. 1590、2009、p22-p23
- ② 「ふるさと一番 佃・月島」、NHK 総合、2008、ガイド役：志村秀明
- ③ 中央区民オープンカレッジ「月島の魅力 —NHK 連続テレビ小説「瞳」の舞台を読み解く—」、中央区、2008、講師：志村秀明
- ④ ポスター展示「NHK 連続テレビ小説「瞳」 (東京メトロ月島駅地下通路)、中央区・月島もんじゃ振興会共同組合、協力：芝浦工業大学地域デザイン研究室 (志村秀明)
- ⑤ 「かめたん (亀戸地域資源単語帳)」、(財) 江東区地域振興会、2008、編集・作成協力：志村秀明、芝浦工業大学地域デザイン研究室
- ⑥ 亀戸文化センター大学連携講座「亀戸のまちのサポーターになろう 2」、(財) 江東区地域振興会、2008、講師：志村秀明
- ⑦ 「Water Frontier Project」、主催：トウキョウ建築コレクション、2009、提案製作：芝浦工業大学地域デザイン研究室 (志村秀明)
- ⑧ 「水辺のまちづくりシンポジウム」、江東ケーブルテレビ、2008、豊洲地区運河ルネッサンス協議会準備会 (幹事：志村秀明)
- ⑨ 「豊洲地区運河ルネッサンス協議会」、設立 2009 年 3 月、幹事：志村秀明
- ⑩ (株) アルセッド建築研究所、「平成 20 年度 奥会津景観保全事業報告書 —美しい奥会津の里づくり—」、発行：只見川電源流域振興協議会、作成協力：芝浦工業大学地域デザイン研究室 (志村秀明)
- ⑪ 芝浦工業大学オープンカレッジ「江東・東京を楽しむための地域学・界隈学入門」、芝浦工業大学、2008、メイン講師：志村秀明
- ⑫ 芝浦工業大学地域デザイン研究室 (志村

秀明) ホームページ：
<http://www.sim.arc.shibaura-it.ac.jp/>
ブログ：
<http://simlabfollowup.blog.shinobi.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

志村 秀明 (SHIMURA HIDEAKI)
芝浦工業大学・工学部・准教授
研究者番号：10333139

(2) 研究分担者

無し

(3) 連携研究者

無し

(4) 研究協力者

浅海宏匡 (芝浦工業大学大学院修士課程)
岩田啓吾 (芝浦工業大学大学院修士課程)
後藤有揮 (芝浦工業大学大学院修士課程)
赤堀弘幸 (芝浦工業大学大学院修士課程)
黒崎かをる
(芝浦工業大学大学院修士課程)
島田修佑 (芝浦工業大学大学院修士課程)
納谷和孝 (芝浦工業大学大学院修士課程)
松島裕司 (芝浦工業大学大学院修士課程)
黒沼剛 (芝浦工業大学建築学科)
岩井百希恵 (芝浦工業大学建築学科)